

「嵐を静めるイエス」

§ 065 マコ 4 : 35～41

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ユダヤ人たちは、イエスを拒否した。
- ②つまり、イエスが提供するメシア的王国を拒否したのである。
- ③それ以来、奥義としての王国の時代に入った。
- ④イエスの教え方が変化した。イエスはたとえ話だけで教えるようになった。
- ⑤イエスの奇跡は、弟子訓練を目的としたものとなった。
- ⑥この箇所(の)の奇跡は、弟子訓練という文脈の中で読まねばならない。
- ⑦イエスの行い(奇跡)が、イエスのことば(教え)の真実性を証明する。

(2) 連続して起こる奇跡

- ①自然界の支配
- ②悪霊の追い出し
- ③不治の病の癒し
- ④死者の蘇生

(3) A. T. ロバートソンの調和表

「湖を渡る際に、イエスは嵐を静める」 (§ 65)

マコ 4 : 35～41、マタ 8 : 18、23～27、ルカ 8 : 22～25

2. アウトライン

- (1) イエスの一日 (35 節)
- (2) 弟子たちを訓練する出来事 (36～37 節)
- (3) 弟子たちの反応 (38 節)
- (4) イエスの対応 (39～40 節)
- (5) 弟子たちの驚き (41 節)

3. 結論 :

- (1) イエスの 2 面性
- (2) 人生の嵐に会った時

嵐を静める奇跡の意味を理解する。

I. イエスの一日 (35 節)

1. 生き生きとした描写

(1) 目撃者の情報であろう。

①マルコは、ペテロから直接この話しを聞いたのであろう。

2. 35 節

「さて、その日のこと、夕方になって、イエスは弟子たちに、『さあ、向こう岸へ渡ろう』
と言われた」

(1) 「その日のこと、夕方になって」とある。

①同じ日が続いている。実に長い日である。

(例話) 聖地旅行の1日

(2) その日に何が起こったかを復習する。

①イスラエルの指導者たちがイエスを拒否したとき、イスラエルの民は赦されない罪を犯した。

②パリサイ人たちは「しるし」を要求したが、裁きの宣言を受けた。

③イエスは奥義としての王国について教え始めた。それが9つのたとえ話である。

④その教えの最中に、イエスの家族がイエスを連れ戻そうとしてやって来た。

⑤この一日で、イスラエルの2000年に及ぶ運命が決まった。

(3) これでイエスの肉体が疲れないはずがない。

①イエスが舟の中で眠ったのは、よく理解できる。

(4) イエスから弟子たちに、「さあ、向こう岸へ渡ろう」と提案された。

①事前の準備はない。

②恐らく、休息の場、静思の時を、必要とされたのであろう。

II. 弟子たちを訓練する出来事 (36～37 節)

1. 36 節

「そこで弟子たちは、群衆をあとに残し、舟に乗っておられるままで、イエスをお連れした。他の舟もイエスについて行った」

(1) 舟を操ったのは、弟子たちであった。

「嵐を静めるイエス」

①彼らの多くが、経験豊かな漁師たちであった。

(2) 他の舟(複数形)

①イエスの教えを、湖上で小舟に乗って聴いていた人たちがいたということ。

②彼らは、イエスのそばにいたいので、イエスの舟について行った。

③次に起こる嵐は、弟子たちだけでなく、それらの小舟に乗っていた人たちも経験した。

④イエスは、弟子たちだけでなく、それらの人たちも救ったのである。

2. 37節

「すると、激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水でいっぱいになった」

(1) ガリラヤ湖の地形のゆえに、このような激しい突風が起こる。

①ガリラヤ湖は、すり鉢型になっている。

②ガリラヤ湖の上は、風の通り道になっている。

(2) 並行箇所と比較

「すると、激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水でいっぱいになった」(マコ)

「すると、見よ、湖に大暴風が起こって、舟は大波をかぶった」(マタ)

「ところが突風が湖に吹きおろして来たので、弟子たちは水をかぶって危険になった」

(ルカ)

(3) これは、非常に危険な状態である。

①通常漁師たちは、突然の嵐に備えるために、カペナウム近辺で漁をしていた。

②この場面のように、沖合で嵐に会うと、大変危険である。

③夕刻の突風の場合、さらに危険である。

III. 弟子たちの反応(38節)

1. 38節 a

「ところがイエスだけは、ともなうで、枕をして眠っておられた」

(1) 嵐の舟の中で眠るイエス

①肉体的に疲れ切っていた。メッセージを語ると、エネルギーを消耗する。

②向こう岸に着くまでの短い時間、休息しようと思われた。

③これは、イエスの人間性を示している。

「嵐を静めるイエス」

(2) 眠っている場所

- ①「とものほう」は、船の最後尾で、唯一水が溜まらない場所である。
- ②「枕」は、座るための低いベンチであり、頭を載せることもできた。

2. 38節b

「弟子たちはイエスを起こして言った。『先生。私たちがおぼれて死にそうでも、何とも思われませんか』」

(1) この言葉は、イエスへの信頼を欠いた言葉である。

- ①イエスの介入を待ちきれない弟子たちがそこにいる。

(2) この言葉を言ったのは、誰か。

- ①弟子たちが言った。
- ②恐らくスポークスマンは、ペテロであろう。
- ③「何とも思われませんか」という言葉は、マルコの福音書だけに出て来る。
- ④恐らくペテロは、忘れていなかったなのであろう。それをマルコに伝えた。

3. ヨナ1:5~6との対比

「水夫たちは恐れ、彼らはそれぞれ、自分の神に向かって叫び、船を軽くしようと船の積荷を海に投げ捨てた。しかし、ヨナは船底に降りて行って横になり、ぐっすり寝込んでいた。船長が近づいて来て彼に言った。『いったいどうしたことか。寝込んだりして。起きて、あなたの神にお願いしなさい。あるいは、神が私たちに心を留めてくださって、私たちは滅びないですむかもしれない』」

IV. イエスの対応 (39~40節)

1. 39節

「イエスは起き上がって、風をしっかりとつけ、湖に『黙れ、静まれ』と言われた。すると風はやみ、大なぎになった」

(1) 「静まれ」という動詞

- ①ギリシア語で「フィモオウ」。
- ②英語で「muzzle」。
- ③意味は、口輪をはめる、口を封じる。
- ④マコ1:25では、悪霊の追い出しに使われている動詞である。

「イエスは彼をしかって、『黙れ。この人から出て行け』と言われた」

- ⑤ある学者は、この嵐の背後に悪霊の働きがあるとも考えられるという。

(2) 「すると風はやみ、大なぎになった」

- ①ことばで天地を創造された方が、ことばで被造世界を支配される。
- ②この変化は、急激なものであった。

2. 40 節

「イエスは彼らに言われた。『どうしてそんなにこわがるのです。信仰がないのは、どうしたことです』」

(1) 「どうしてそんなにこわがるのです」

- ①ギリシア語で「デイロス」。
- ②英語で「fearful」。
- ③日本語では、恐怖を感じることを。

(2) 訳文の比較

「どうしてそんなにこわがるのです。信仰がないのは、どうしたことです」(新改訳)

「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか」(新共同訳)

「なぜ、そんなにこわがるのか。どうして信仰がないのか」(口語訳)

(3) イエスは弟子たちの信仰が成長していないことを嘆かれた。

①マコ4:11

「あなたがたには、神の国の奥義が知らされているが、ほかの人たちには、すべてがたとえで言われるのです」

②マコ4:34

「たとえによらないで話されることはなかった。ただ、ご自分の弟子たちにだけは、すべてのことを解き明かされた」

③神の権威と力はイエスの内に宿るのであるが、それを認めることは難しい。

V. 弟子たちの驚き (41 節)

1. 41 節

「彼らは大きな恐怖に包まれて、互いに言った。『風や湖までが言うことをきくとは、いったいこの方はどういう方なのだろう』」

(1) 「大きな恐怖に包まれて」

- ①ギリシア語では「フォベオウ」。
- ②英語では「awe」。

「嵐を静めるイエス」

- ③日本語では、畏怖の念を抱く。恐怖と畏怖とは、別である。
- (2) 弟子たちが持っていた古い宝（旧約聖書の知識）
 - ①詩 89 : 8~9
「万軍の神、【主】。だれが、あなたのように力がありましょう。主よ。あなたの真実はあなたを取り囲んでいます。あなたは海の高まりを治めておられます。その波がさかまくとき、あなたはそれを静められます」
 - ②詩 107 : 29
「主があらしを静めると、波はないだ」
 - ③弟子たちにとっては、神だけが嵐を静めることができる。
- (3) 新しい宝は、まだ身に付いていなかった（奥義としての王国の知識）。
 - ①目の前にいるイエスというお方は、だれなのか。
 - ②信仰の成長が見られる。

結論

1. イエスの2面性

- (1) 人としては、疲れて眠っておられら。
- (2) 神としては、眠ることなく弟子たちを見守っておられた。
「見よ。イスラエルを守る方は、まどろむこともなく、眠ることもない」(詩 121 : 4)

2. 人生の嵐に会った時

- (1) 嵐は、私たちが人生で会う苦難の象徴である。
- (2) 弟子たちの訓練
 - ①イエスは弟子たちを守られた。
 - ②弟子たちは、奥義としての王国でどのように行動すべきかを学んだ。
 - ③パリサイ人たちのように、イエスの力を悪霊に帰すことをしてはならない。
- (3) 私たちの訓練
 - ①イエスは私たちが理解してくださる（人間としてのイエス）。
 - ②イエスは私たちが守ってくださる（神としてのイエス）。
 - ③今の時は、奥義としての王国である。

* 肉体の死に遭遇したとしても、霊的には最後まで守ってくださる。